第2部：最新のソフトウェア事例6

現場に浸透するクラウド型製品開発管理「PRISM」の特徴・機能と効果的な活用法

Things　鈴木　敦也*、伊藤　宗寿**
*すずき　あつや：代表取締役CEO、**いとう　むねひさ：カスタマーサクセス

筆者（鈴木）は、商社やメーカー在籍を経て、2022年9月に株式会社Thingsを創業し、クラウド型製品開発管理ソリューション「PRISM」の開発・販売を行っている。製造業経験者とウェブ業界経験者の共同チームにより活動を行っている。

PRISMの開発コンセプト

PRISMは、製造業に特化したコラボレーションツールとして開発を開始した。筆者はメーカー在籍時代に数多くの課題を感じており、「部門間の壁」、多重下請け構造を起因とした「情報の不透明さ」、その結果生じる「非効率性」を解決したいと考えていた。しかし、製造業特化ツールの多くは高機能な一方で使いこなすことに時間がかかるうえ、設計・生産・調達などの部門ごとの利用であることが多く、PLM（Product Lifecycle Management）コンセプトのポテンシャルを活かせていない事例が多いと感じていた。

そこで、筆者たちは「モノのデータを民主化する」というビジョンを掲げ、BOM（部品表）を中心とするフレームワークにより、製品開発データを部門間・会社間で共有する仕組みを開発している。

PRISMのアーキテクチャ・概要

PRISMは単一のデータモデルとして、BOMを基盤に、複数のサービスを展開していく。一般的な製造業のシステムは部門ごとに導入判断がされ、BOMを共有し部門ごとのBOMを管理していることが多い。また、分断されたシステムには承認ステータスやアクセス権限などの互換性がなく、製品の状態管理が一貫していない。このため設計変更、品質情報や製品の生産ステータスなどの更新の際は、各部門が管理するBOMを手動で更新する必要があり、多くの管理工数が発生する。そうして編集されたデータは不完全なため、時として大きな手戻りにつながり企業収益を圧迫する。

PRISMは製造業の技術部門で使用されるBOMに関するすべてのデータを記録する単一システムを構築し、その上にさまざまなアプリケーションを複合的に開発していく方針を採用している（**図1**）。ミドルウェアを一本化することで、BOMの情報をAPIを通じて共有化できるため、社内の既存システムとの連携を低コストで実現できる点が特徴である。

また、PRISMはクラウド型のシステムであり、クライアント（端末）側もソフトウェアのインストールは必要なく、ブラウザのみで利用できる。社内サーバーの設置やインストールなどいっさい必要なく、契約いただいた翌日から利用開始できる。さらに、社内サーバーがないためサーバーの保守運用コストがまったくかからないこともメリットである。